
りんご物語。

はなちょこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

りんご物語。

【ZPDF】

20735M

【作者名】

はなちよ

【あらすじ】

りんご、十七歳。両親の都合で夏休みの間だけ田舎で暮らすことになった。

のんびりした田舎暮らしの中で芽生える恋。

「よく来たなあ。一人とも上がりな
ー」「ー」ながら「いつのまお婆ちゃん。

「おじやましまーす！」

「やう言つて元気良く家に入つてこくのは妹の、あんず。
「まあ。小さいのにお行儀がいいこと」
そう言つたのは私の叔母さん。

「りん」「ちやんも上がって、上がって」

叔母さんの旦那さん、つまり叔父さんが私にやう言つた。
私は靴を脱いで「おじやまします」と言つて家に上がる。
叔父さんが辺りを見渡して言つた。

「あれ？ 吉彦は？」

叔母さんも辺りを見渡して言つた。

「あー。朝までいたのに・・・・出かけたのかしい」

私の母が夏休みの間、単身赴任の父の所へ行くことになった。
夏休みの間だけ母のお姉さん、つまり叔母の家にお世話になると
になつた。

叔母さんは、旦那さんである叔父さん、叔父さんのお母さんの三
人暮らしのだそうだ。

「田舎で驚いたでしょ？」

叔母さんがそう言つて私とあんずに冷たい麦茶を出してくれた。
あんずは喉が渇いていたらしく、ゴクゴクと麦茶を飲み始めた。

「さつき、すこしく綺麗な川があつたよ」

私はやう言つて麦茶を一口飲んだ。

「の辺りは本当に田舎だ。

隣の家は一キロ先だし。

すぐ裏は山だし。

ここまでの道のりも山巒りみたいだつたし。
でも、のどかで綺麗だ。

「りんごちゃんは、いくつになつたんだつけ」

叔父さんにはう聞くかれ、私は言ひ。

「一七になりました」

「しつかりしてゐなあ。おちびさんはいくつだ?」

お婆ちゃんが、あんずにう聞くいた。

あんずは空になつたコップをちやぶ皿の上に置いて
お婆ちゃんに言つた。

「ちびじやないもん!」

「あんず!」

私がそう言ひと、お婆ちゃんが笑つた。

「元氣がいいの?」

「あんずは七歳です」

私が代わりにう答えた。

お婆ちゃんは田を細めながら、あんずを見て言つた。

「そつかあ。七歳かあ」

そして、お婆ちゃんはポソリと言つた。

「菜摘より一つ年上か」

なつみつて誰なんだろ?・・・・・。

そんなことを疑問に持ちつつ、叔母さんに私達が寝る部屋に案内
してもらつた。

「階段ギーギー聞ひね~!」

「もー。あんず!」

「ふふ。いいのよ。りんごちゃん。もつこの家も古にからねえ」

叔母さんがう言ひながら、一階の隅の部屋のドアを開けた。
「ここがあなた達が寝る部屋よ」

私は部屋を見渡した。

六畳ほどの古いけど、さつぱりした和室だった。

「疲れたでしょ。夕飯になつたら呼ぶから、少し休んでたら？」

叔母さんの言葉に、私は頷いた。

「ふう」

私はそう言って荷物を置いた。

「お姉ちゃん」

あんずがそう言って私を呼ぶ。

「なに？」

「うさぎさん」

あんずがそう言って柱の下の方を指差す。

そこにはピンク色のペンでうさぎの落書きがしてあった。子供が描いたものだ。

お婆ちゃんがさつきポツリと呟いたのを思い出す。

なつみちゃん・・・・・・?

叔母さんと叔父さんは息子が一人いるだけだ。しかも、もう社会人で一人暮らししている。

従姉妹に小さい子なんていないけどなあ。

疲れていて夕方まで眠つてしまつた私達。

叔母さんに夕飯を呼ばれて

夕飯を食べた後、しばらく話をじて。

叔母さんが言った。

「りんごちゃん、あんずちゃん、お風呂入つて来たら?」

「そうだな。ちゅうどお風呂がわいたところだ」

叔父さんも言つ。

私はあんずに言つた。

「あんず、お風呂行くよ」

「あんず、お婆ちゃんとお風呂入るからいい」

あんずはすつかりお婆ちゃんになつていてる。

「りんごちゃん、一人でゆっくり入つておいで」
お婆ちゃんがそう言つたので、私はお風呂場へ行つた。

「あんず、お婆ちゃんに迷惑かけなきやいいけど」
私は一人でお風呂に入りながらそう咳く。

ガラガラ。

脱衣所ののドアを開ける音。

「あんず？」

私がそう言つと、お風呂場のドアが開いた。

「夏子？」

そう言つて顔を出したのは。

見知らぬ男の人だつた。

「キヤアアアアアアアア！」

「なんでお風呂に誰か入つてゐるのか聞かずにドアを開けるんだよ！」

叔父さんが怒鳴る。

「だつて。見慣れない服があるから・・・・」
見知らぬ男の人・・・・いやお風呂を覗いた男がそう言つ。
「見慣れない服があるからつて覗くんじやないの！」
今度は、男に叔母さんが怒鳴つた。

「夏子さんと間違えたんだつ！」

お婆ちゃんがそう言つ。

お婆ちゃんの言葉に男は黙つた。
そういえば。

「夏子」つて言つてたつけ。

「ごめんな

男はそう言つて謝つてきた。

「いいですよ・・・・」

湯船に入つてたから私の裸もあんまり見えなかつたのと。

男が服のまま覗いたのが救いだつた。

「紹介遅れたけど、この覗きのおじさんは、吉彦。叔父さんの一番下の弟」

「叔父さんがそう言ひへ。

「嫌な紹介の仕方すんなよ、冗貴」

吉彦おじさんは「おじさん」と呼びほどの歳には見えない。

私は吉彦おじさんにペコリとお辞儀をした。

そして、一階にバタバタと上がりつて行つた。

「覗きなんかするか、つん」ちやん怒つちやつただひ

叔父さんがそう言つて吉彦おじさんをゾンと押す。

「故意で覗いたわけじゃないで！」

吉彦おじさんはそう言つて困つた顔をした。

これが、おじさんとの出会いだつた。

夜。

辺りは静かで。

隣で寝ている、あんずの寝息が聞こえるだけだつた。

私はガバッと布団から起き上がる。

そつとドアを開けて。

廊下に出た。

窓の外を眺めた。

すぐ裏は山だ。小ぢな山だけだ。

空を見上げた。

星がいっぱい見える。

「なんだ、眠れないのか」

そう言つて隣の部屋から、吉彦おじさんが出てきた。

隣、吉彦おじさんの部屋だつたんだ。

私は何も言わずに夜空を見上げた。

「まだ怒つてるのか。『めんな』

吉彦おじさんせりつて頭を下げる。

「怒つてないよ」

私はやつとまた夜空を見上げた。

「やつか」

吉彦おじさんはやつて私の隣に座つた。

「おじさんも眠れなごの?」

「おじさんじやない。まだ一八歳」

「でも、お兄ちやんつて感じでもなごし」

「やうだな」

吉彦おじさんはやつて笑つた。

「一九。一ンジン残しちゃダメだ」

次の日の朝食。

昨日よつに起きやかになつた食卓。

吉彦おじさんは、やつて、あんずの目の二ンジンをぱくつと食べた。

「せり。おこしこや」

吉彦おじさんの様子をじつと見ていたあんずは。
嫌いな二ンジンを口に入れた。

「えらい。あんず」

私がやつて、あんずは二ツ笑つた。

「えらいや」

吉彦おじさんは、そう言つて、あんずの頭をなでた。

昨日はちつとも気づかなかつたけど。

吉彦おじさんは笑つた顔、すく優しいんだ。

「お姉ちやん、遊ぼう。」

私が宿題をしていくと、あんずがやつて服の裾を引っ張る。

昨日、叔父さん頼んで、机を出してもらつた。

「わ。宿題やつてるのー。あんずも夏休みの宿題あるでしょ?」

私がやつぱり、あんずはほつぺたを脹らませた。

「あんず、おじさんと遊ぶか！」

そう言つて部屋に入つてきたのは、吉彦おじさんだつた。

私は時計を見て不思議に思つた。

「ねえ。吉彦おじさん、仕事は？」

「おじさんは小説家ですへ」

「へえ。売れてるの？」

おじさんは黙つたので、私は言つた。

「・・・・・売れてないんだ」

「こいつか売れるわ」

吉彦おじさんはやつぱりと小さなボールをあんずに投げた。あんずはそれをキャッチして吉彦おじさんに投げる。

「上手いな」

吉彦おじさんはやつぱり言つた。

私はふと聞いてみた。

「ねえ。夏子さんって誰？」

「子供は知らなくていいの」

吉彦おじさんはやつぱりとボールを投げる。

「ああん。とれないーー！」

吉彦おじさんの投げたボールはあんずの頭上高く上がつて転がつていつた。

あんずは部屋の隅のボールを取りに行く。

「前の奥さんだよ」

吉彦おじさんはボソリと言つた。

そして、あんずのボールをキャッチする。

「前のつて・・・・・・」

私がやつぱりと吉彦おじさんは言つた。

「ああ。先月、離婚したばかり」

「・・・・・・」

「うなんだ」

「一人娘も前の奥さんが引き取つていつちゅうたしなあ

「もしかして、なつみちゃん？」

私の言葉に、吉彦おじさんが驚いた。

「え？ ああ。なんで知ってるんだ？」

「お婆ちゃんが、あんずの一つ年下だつて言つてた」

「ああ。お袋は、菜摘のこと可愛がつてたからな」

吉彦おじさんはそう言つてあんずにボールを投げる。

「なんで別れたの？」

「聞いたやいけない、と思いつつ。

思わず言葉にしてしまつ。

「俺の本がなかなか売れないと、愛想つかしたんだよ」

「・・・・・」

「事実、家賃が払えなくてこの家に家族そろつて厄介になつてたわけだし」

吉彦おじさんが苦笑いした。

私は、複雑な気分になつていた。

吉彦おじさんは毎日家について。

あんずと遊んでくれて、私の話し相手になつてくれた。

小説は夜書いているらしい。

「氣をつけてね」

叔母さんがそう言つてお弁当を渡してくれた。

「川に入っちゃいかんよ」

お婆ちゃんがそう言つた。

「はーい」

私とあんずは吉彦おじさんに連れられて、近くの川へ行つた。

ここへ来てもう一週間が経つていた。

あんずはすつかりお婆ちゃんと吉彦おじさんになついていた。

「あんず。川に入っちゃダメよ」

「はーー」

あんずはそう言って川原の石で遊び始めた。

「しかし暑いなあ」

吉彦おじさんがサングラスをかけて田舎に座りながらしゃべった。

「吉彦おじさん、変な人みたい・・・・・・」

私がそう言つと、あんずが笑いながら言つた。

「変なのー！」

吉彦おじさんはサングラスをはずした。

叔母さん特製のお弁当を食べた後。

あんずが田をこすり始めた。

「眠いの？」

私がそう聞くと、あんずは言つた。

「ちょっと」

「じゃあ。帰つてお昼寝だな」

吉彦おじさんがそう言つた。

その時だった。

急に強い風が吹いて、あんずの帽子が飛ばされた。

帽子は川に落ちた。

私は急いで川に入つてあんずの帽子を拾つた。
川の水は私の足首くらいの深さしかなかった。

「わっ！」

戻りうとした時、足が滑つた。

「おつと」

吉彦おじさんが私の体を支えてくれたので、私は転げずにすんだ。

私の顔は吉彦おじさんの胸にスッポリとおさまった。

「！――――！」

私は思わず抱きついてしまつたことに気づいて。

吉彦おじさんはから思つておつ離れた。

「あふひ・・・」

やつ言つかけた吉彦おじさんが今度は足を滑りせた。

吉彦おじさんは尻もちをついた。

私は吉彦おじさんにつかまつていたので、一緒に尻もちをついた。

「あ～あ。おばちゃん達に怒られるよー？」

「あんずがそつ言つて私達を見た。

私と吉彦おじさんはお互にの顔を見合わせて笑つた。

ぱちやん。

湯船に入る。

私は口まで湯船に浸かつた。

叔母さん達には、理由を説明したので怒られなかつた。

むしろ怪我がないか心配された。

私も吉彦おじさんも服はビショビシコになつたものの。怪我はなかつた。

「はーあ」

私はため息をついて、湯船に頭まで浸かつた。

ダメだ。ダメダメ！

その夜。

私がふと窓の外を見ると、庭に誰かいることに気がついた。田をこじりしてよく見てみた。

「吉彦おじさん」

私が庭に出てやつと吉彦おじさんが振り向いた。

「おお。りんじか」

吉彦おじさんの「りんじ」の面の方はまるでお父さんみたいだ。

「あんずはー？」

「寝てるよ」

私はやつ言つて夜空を見上げた。

今日も星が見える。
月が綺麗だ。

「奥さん、恋しい？」

私の言葉に吉彦おじさんが驚いて振り向く。

「なんで・・・・」

「だつて。初めて会つたとき、私の服見て、奥さんと間違えたんで
しょ？」

「そう。吉彦おじさんはハッキリ言つた。

「夏子」つい。

前の奥さんの名前。

「ん～。まあ。愛してたからな」

「今は？」

「ああ・・・・」

吉彦おじさんは吉つ口を向いた。
ねえ。

そんなに寂しそうな顔しないでよ。

奥さんのこと、まだ愛してるんだね？
胸がギコッとしめつけられる感じがした。
ダメ。

だけど、話したいよ。

気づいたら、私は吉彦おじさんになり言つた。

「好き」

私の言葉に。

吉彦おじさんは笑つて言つた。

「おじさんをからかっちゃダメだよ」

吉彦おじさんはそのまま吉つ口で私の頭をポンポンとなでた。
なでられた所がカーシと熱くなつていくよくなつた気がした。
「からかつてないもん」

「りんご、いくつだ？」

「一七」

「学校に好きな男の子とか、いないのか」

「・・・・・・いないよ」

「じゃあ、学校で好きな男の子見つけるんだな」「吉彦おじさんはそう言って私の頭をまたなでて家に戻つて行つた。「早く寝ろよ」

吉彦おじさんはそう言って家に入つてしまつた。私の目から涙がポロポロ流れた。だけど。これは予想したこと。いくら血がつながつてないからつて。

親戚は親戚。

私は吉彦おじさんの「親戚の女の子」でしかない。それに、吉彦おじさんは前の奥さんが好きで。そんなこと、分つてた。

次の日の朝。

なんだか一階が騒がしい。ガバッと起きて時計を見る。

「やだ、九時！」

昨日、なかなか寝つけなかつた。

私は急いで起きると、パジャマから部屋着に着替えて一階へ降りた。

「だから。いまさらなんで来るんだよー」「

「あなたに会いに来たのにそんな言い方ないでしょー」「

ドア越しに聞こえる声。

吉彦おじさんの声と・・・・・・女人の声。まさか！

「まあまあ。いつして遠いとこから夏子さんも来てくれたんだから」「

叔母さんの声。

夏子つて・・・・・・。

吉彦おじさんの前の奥さん！

私は胸がギュッとしめつけられるような感覚におそれれた。

私は耳をふさごで家から飛び出した。

前の奥さんが・・・・・夏子さんがここに来た理由。
ドラマとかだと、三つを戻すために戻つてきたりする。
そうだ。

そうに違いない！

ああ。

吉彦おじさん、夏子さんのことまだ愛してるみたいだから。
きっと一人は夫婦に戻つちゃうよ。
なつみちゃんのことだって、あるだろ？・・・・・。

キキーッ。

自転車のブレーキの音。

「危ないだろ！」

男の子がそう言つて私を睨みつけた。

でも涙をポロポロ流している私を見て驚いた。

家に帰ると。

私は何事もなかつたかのように振舞つた。

夏子さんはいなかつた。帰つたらしい。

私は何を話したのか、とか吉彦おじさんには聞かなかつた。
といふか聞けなかつた。

吉彦おじさんは、それからじめじめあんまり喋らなかつた。

夏休み最後の日。

私が部屋で帰る支度をしていると。

吉彦おじさんが部屋に入つてきた。

「もう帰るのか

「うん」

私はそう言つた後、黙つて荷物をカバンにつめた。
吉彦おじさんもしばらく黙つていた。

そして、沈黙をやぶつたのは吉彦おじさんだつた。

「なあ。りんご。いつか、りんごをモテルにした小説書いていいか
？」

吉彦おじさんはそう言つて私を見た。

「印税、私にも分けてね」

「アハハ。言うな」

吉彦おじさんはそう言つてからしばらく黙つてこゝへ言つた。

「今日、夏子と会つて話してくるよ」

胸がズキッとした。

だけど。私はカバンに荷物をつめながら言つた。

「ふーん。そつか」

何を話すの？そんなこと、聞けなかつた。

「りんごちゃん」

庭にいたのは、あの自転車の男の子だつた。

二口二口して私に駆け寄つてきた。

あの時、吉彦おじさんが好きなこととか、色々話してしまつた人。

この家のお隣さんで、私と同じ高校一年生。

「また来てね」

叔父さんも叔母さんもお婆ちゃんもそう言つた。

吉彦おじさんはいなかつた。

私達は一ヶ月と少し過ごしたこの家を後にした。

それから。

あの自転車の男の子とメール交換を始めた。

というか一方的にアドレスを聞かれた。

それから私達は付き合つたけど。

一年後。

私から別れを告げた。

まだ吉彦おじさんが忘れらなかつた。

そして。

私が大学生になつた春のこと。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん」

あんずが突然、部屋に入つてきた。

「ちょっと。ノックくらいしなさいよ」

「大二ユース！」

あんずは人の話も聞かずに嬉しそうに言つた。

「大二ユース？」

私は走り出していた。

目的地は近くの本屋。

あんずが言つたんだ。

「吉彦おじさんつていたよね。あのおじさんの本、ベストセラーだつて」

「吉彦おじさんの本？ 本当に？」

「うん。本当だよ。だつてね・・・・・・」

本屋に入ると、すぐに田口つぐとに本が並べてある。

「この春、大ベストセラー小説」

そう紹介されてある、その本を手にとつた。

「だつてね、お姉ちゃんの名前が書いてあつたもん」

あんずの言葉が頭をグルグルと回る。

私はその本を手にとつてドキッとした。

すごく驚いた。

その本のタイトルは「りんご物語」

作者。

田村吉彦。

本の裏には内容も書かれている。

「りんご」という一七歳の少女が恋をしたり友情を育んだりして成長する、あつたかくてピュアな物語。

私は最後のページをめくつた。

最後にはこう書かれていた。

「彼女は、いつかとても素敵な人と出会うだろ?」

私はその文章を見て笑った。

目に涙が浮かんでいた。

今年の夏休みは、あんずを連れて、あの家に行こう。

あの星空を。

あの山を。

あの川を。

また、見たい。

いつか会えるんだよね。

吉彦おじさんより素敵な人と。

(おわり)

（後書き）

読んでくれてありがとうございました。

数年前にブログに載せた小説です。

今は私も吉彦おじさんより年上になってしまいました（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0735m/>

りんご物語。

2010年10月8日14時38分発行